

O3-013

小児科外来で行う乳児健診の利点と課題

関 千夏、番場 誉

長野医療生活協同組合 長野中央病院 小児科

当院で行なっている6-7ヶ月と9-10ヶ月乳児健診の2年間の実施状況をまとめ、今後の健診のあり方について検討したので報告する。当院は、人口37万人、出生数は年間2100から2400人の都市にある総合病院である。外来は、新型コロナウイルス感染症の流行後、来院者は半減した。現在の乳児健診は、週1回、2から5人を医師と看護師、理学療法士、栄養士、心理師が対応する。問診時に、生活状況を聞き、養育環境も聞き取れる範囲で確認する。待合スペースに、ハイハイできるフロアを用意して交流を持てるよう、スタッフが適宜声掛けを行う。交流が強制にならないよう配慮している。診察他各ブースを巡回して終了し、その後、スタッフ全員ミーティングで情報共有し、家庭には子育ての助言を後日郵送する。2022年と2023年の実施数は、延べ人数が、132人、145人であった。6-7ヶ月健診と9-10ヶ月健診の両方受診したのは、50人、55人であった。運動機能の遅れでリハビリ再診したのは、12人、9人、発達のアンバランスで外来通院に移行したのは、共に4人で、その後自閉スペクトラム症(ASD)と考えられたのは2人(2.4%)、3人(3.3%)であった。養育等に課題があり自治体と共有を行なったのは、6人、3人、母親の育児不安に相談を要したのは6人、3人、体格や便秘、アレルギーなどで通院を行ったのが8人、5人であった。近年の課題は、乳児期のスマホ視聴で、控え方を伝え、他の遊びや絵本の情報提供を行っている。ASD児は、運動、偏食、睡眠、便秘などの課題から始まり、その後発達の遅れなどを経ることが多く、早期に変化を共有できることは生活動作の自立支援に有用と考える。特性の理解が困難な場合、リハビリや心理師評価を併用して発達獲得が見える機会を作り、通院を継続させている。健診で介入できることは様々で、当院では多職種の良さが活かされている。ただし、自治体からの委託費用が低いことは病院として難しい側面となっている。行政の母子保健でも相談事業はあるが、医療では随時治療に介入できるメリットがあり、身体的要因と発達支援をスムーズに行っていると感じる。子育てそのものが多様化し、ネット環境の拡大と共に新たに子育てに関わる人材の育成も必要である。子育ては昔ながらの無料の助言で済むものではない。健康で安全な成長のために丁寧な健診が必要と考える。

O3-014

神戸市の1歳6か月児健診における心理評価の新型コロナウイルス感染症(COVID-19)流行による疫学的変化

阿瀬 美保¹⁾、谷 杏奈²⁾、小澤 恵²⁾、丸山 佳子²⁾、三品 浩基²⁾、高田 哲³⁾、西村 範行¹⁾¹⁾神戸大学大学院 保健学研究科、²⁾神戸市こども家庭局、³⁾神戸市総合療育センター

【背景】 新型コロナウイルス感染症(COVID-19)流行下では、生活環境の変化や社会的制限によって、乳幼児の言語発達の遅れや社会性の発達に課題が見られることが報告されている。さらに、COVID-19流行による保護者のストレスや育児負担の増加が、乳幼児の心理的発達にも影響を及ぼす可能性が指摘されている。【目的】 神戸市の1歳6か月児健診における心理評価を用いて、COVID-19流行の心理的発達への影響を明らかにすること。【方法】 神戸市の妊娠届け出、新生児訪問、および1歳6か月児健診における85評価項目の電子化されたデータを分析した。1歳6か月児健診での(心理士による)心理評価、(保健師による)育児評価、(健診医による)発達評価、(健診医による)身体評価について、所見なし、所見ありに分類した。対象は、2018年4月～2022年3月に神戸市の1歳6か月児健診を受診した児とし、2018年4月～2020年3月(COVID-19前群)と2020年4月～2022年3月(COVID-19後群)の2群を比較した。統計解析にはフィッシャーの直接法を用い、 $p<0.05$ を有意とした。評価項目間の相関分析にはスピアマンの順位相関係数を用いた。【結果】 COVID-19前群の対象者22,276人、1歳6か月児健診受診者21,166人、心理評価受診者1,928人、COVID-19後群の対象者20,568人、1歳6か月児健診受診者19,711人、心理評価受診者1,849人であった。COVID-19前後で、心理評価の受診率には有意な変化を認めなかったが($p=0.402$)、心理評価の有所見率は有意に上昇した($p=0.004$)。(市内9区の)各区における有所見率の変化には違いが認められた($-18\%\sim+31\%$)。心理評価とその他の84評価項目との相関分析では、育児評価、各区、指さし、ことばの4項目との関連が示唆された($R>0.2$)。育児評価は、COVID-19前後を通じて最も強い関連を示した($R=0.38\sim0.40$)。各区における相関の程度には違いが認められた($R=0.11\sim0.72$)。【考察】 神戸市の1歳6か月児健診における心理評価では、COVID-19の流行前後で有所見率が有意に上昇しており、COVID-19流行が神戸市の1歳6か月児健診受診児の心理的発達に影響を及ぼしたことが示唆された。